

【2】次の文章は「源氏物語」明石の巻の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

(広島大学、一九九八の一部)

男の御容貌、ありさま、はたさらにも言はず、年^アごろの御行ひにいたく面^{おも}瘦^やせ給へるしも、言ふ方なくめでたき御ありさまにて、心苦しげなる気色^{けしき}にうち涙ぐみつつ、あはれ深く契り給へるは、(明石)「ただかばかりを幸ひにても、などかやまざらむ。」とまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、わが身の程を思ふにも、尽きせず。

波の声、秋の風にはなほ響きことなり。塩焼く煙かすかにたなびきて、取り集めたるところのさまなり。

(源氏) このたびは立ち別るとも藻塩焼く煙は同じかたになびかむ

とのたまへば、

(明石) かきつめて海^あ人のたく藻の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ

あはれにうち泣きて、言^{こと}少ななるものから、さるべきふしの御答^いへなど、浅からず聞こゆ。この常にゆかしがり給ふものの音^ねなど、さらに聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ。(源氏) さらば、形見にも偲^{しの}ぶばかりの一ことをだに。」とのたまひて、京より持ておはしたりし琴^{きん}の御琴取^{こと}りに遣はして、心ことなる調べをほかに掻^かき鳴らし給へる、深き夜の澄めるは、たとへん方なし。入道、え堪^たへで、箏^{そう}の琴取^{こと}りて、さし入れたり。みずからも、いとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきに誘はるるなるべし、忍びやかに調べたるほど、いと上^{じやう}衆^ずめきたり。

問一 傍線部 a に、「ただかばかりを幸ひにても、などかやまざらむ。」とある。

(一) この時の明石の君の気持ちがよくわかるように、ことばを補って、七十字以内で現代語訳せよ。

(二) 明石の君はなぜこのように考えたのか。その理由になる自己認識を示す語句を文章中から五字以内で抜き出して記せ。

問二 傍線部 ① に、「うち涙ぐみつつ」、② 「うち泣きて」について、それぞれの動作の主体を記せ。

問三 傍線部 ア に、「年ごろの御行ひ」、イ 「ゆかしがり給ふものの音」を現代語訳せよ。